
魔法少女 幽 遊 ティアナ

黒金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女 幽 遊 ティアナ

【Nコード】

N0907W

【作者名】

黒金

【あらすじ】

リリカルで美しき魔法少女達。そんな1人のパラレルワールドでのお話……。彼女は彼らを見て、どう生きるのか……。その力を手に入れなにするのか……。

プロローグ 始まりはショック死

死んだ。

兄さんが・・・犯人を逮捕しようとした。

なんでも・・・兄さんは殺人をした犯人を1人で追いかけている時、

犯人の魔法で殺され逃げられたらしい・・・。

その話を同僚の管理局の人に聞いた。

私は死んだように、ベッドに眠りに着いた。

そう・・・頭が真っ白になる位で、私はいつ自分でベッドに入った事すら分からなかった。

でも・・・眼が覚めると、不思議な夢だ。

私は天井まで浮かんで、ベッドには『私』が寝てた・・・。

これ・・・どういう状況だろ・・・？

そんな時、ピンクの変な服を着て、長い青い髪の女の人が杖みたいなのに乗って壁をすり抜けて飛んできた。

「はい！ こんにちは！」

「え、えつと・・・こんばんわ・・・。」

「あたしは三途の川の水先案内人　ぼたんちゃん！　よろしくね！」

「ぼ、ぼたんさん？」

私は・・・」

「言わなくても解ってるよ。」

ティアナ・ランスターちゃん！」

なに？この　ぼたん　っていう人・・・。

なんで私の事　知ってるの？

あ、そつか・・・夢だから、変な人も出てくるんだ・・・。

「そうだね・・・。」

解りやすく言うなら　死神ってやつかな？」

「死神・・・？」

「そつ！簡単に言えば、死んだ人の魂を霊界へ送る役目を持つてるのさ。」

アンタはお兄さん・・・ティーダ・ランスター　の死因を聞いて、少し遅れながらだけど、
寝ながら『ショック死』しちゃたんだよ。」

「・・・私、死んだんですか・・・？」

「そついう事。」

でも、今回アンタが死んじゃうのは物凄く予定外なんだよ。（ある

意味今回もだけどね。」

本来・・・いや、平行世界のアンタはお兄さんの死を乗り越えたんだ。そこで、ティアナちゃんには特別にアンタを生き返らせる為にアシを使わしたのさ。」

平行世界・・・。

パラワレルワールドの私は兄さんの死を乗り越えた・・・？

そんなの無理だよ・・・。だって、兄さんは・・・何時も言ってたんだ。

『ランスターの弾丸は、敵を撃ち抜ける』って・・・。

だから、絶対に帰って来て、明日 一緒にいる筈だったんだよ・・・？

それに・・・『生き返らせるため』って・・・強制じゃない・・・。

「(さてと・・・。本当ならこの場で生き返らせる所なんだけど・・・。

この子・・・今のままじゃあスグに自殺を選んじやいそうだねえ・・・。

コエンマ様の言うとおりに霊界へ連れてった方がいいみたいだね・・・。)

取りあえず、コレに捕まりな。 えんま様の所に行くから！」

「えんま様って・・・？」

「そうだねえ・・・。私の上司って言えば分かるかな？」

えんま様・・・知らない名前(当たり前)だけど・・・その人に言えば私を兄さんと同じ所に送ってくれるのかな・・・？

ばたんさんが乗ってる杖(?)に捕まると、

すごいスピード・・・前に兄さんに連れて行ってもらった遊園地で

乗った

ジェットコースターよりも速いスピードで雲を尽き抜け・・・物凄く広い所に着いた。

下には川が流れていて、物凄く尖がった山がいつぱいあった。数十分もすると、すごく大きい門がある建物に着いた。管理局本局よりも大きい・・・！

門の下に着くと、ぼたんさんはベルを押した。

「ぼたんです。

ティアナ・ランスターを連れてきました。」

『よし！入れ！』

それと同時に、ゴゴゴって音を立てながら門が開くと、それと同時に　うるさくなってきた。

「おい！4丁目のリュウさんが　きてんぞー！！」

「なに！！？　予定よりも半日はええじゃねえか！！！！」

「ばかやろ！それよりも、19丁目のやまさんが　オメエにあいにきてんぞー！！」

「ゲツ！？そりゃあやべえな！　おい！そこのおめええ！4丁目のリュウさん頼むわ！」

「おいおい！今から　3丁目のゲンさんに会いに行く所なんだよ！」

「3丁目のゲンさん！？ そりゃあ、仕方ネエな！おい！新入り共！マニユアル持って、4丁目のリュウさん頼む！！」

「ハイ！！わかりました！！」

角を持った上半身裸のオッサン達が電話をしたり、書類を持って走ったりしてた。

なに・・・？ ここ・・・。

ぼたんさんはそのまま奥の方へ進む・・・。
慌てて私も付いて行くと、1つの部屋に着いた。

そのこの部屋に入ると、青い服を着て黄色のおしゃぶりを加えた 赤ん坊が書類にハンコを押してた。

「コエンマさま。 ティアナ・ランスターをお連れしました。」

「ん？ おお！よく来たな！

悪いが今 霊界は物凄く忙しい！ 故に早速「ちょ、ちょっと待つてください・・・！」

私は 生きたくないです・・・だから兄さんと同じ場所に・・・送ってください・・・！」

「ムウ・・・。悪いが ティアナ・ラン「待たせたな。 コエンマ。」

「なんだよ。 コエンマ！いきなり呼びやがって！」

「おお！待っておったぞ！」

私達が入って来た扉から 1人の『霊』って帽子をかぶったおばあさんと不良っぽいお兄さんが入って来た。

おばあさんは顔を見ると、厳しそうな人だ……。

お兄さんの方はバカっぽそう……。

「ウム！ ティアナ・ランスター！」

お主は『生き返った状態』で平行世界にあるこの者達の世界へ行き、鍛えて貰う事！

もし。 お主が修業を終え、それでも兄と同じ『死』を選ぶのならば そのまま送ってやろう。

だが、お主が『自殺』などをしたら……二度と会えない場所へ送ろう……。」

「……つまりこの人達に鍛えて貰って気持ちが変わらなかったら兄さんと同じ場所へ送ってくれるんですか……？」

「そうだ！」

お前の体はすでに平行世界の世界へ移しておる！

そついう事で頼む。幽助！ 幻海！」

「なるほどな……。」

まっ！俺も暇だった所だし、良いぜ！」

「やれやれ……。老人に鞭を討つとはな。」

「……これは霊界上層部での結論……。」

幽助！お主は妖怪となってしまうた。

『靈光波動拳』は『人間』が使用する『奥義』として決定してしま

ったのだ・・・。

お主の場合『靈光玉』を継承者に渡す事になるが・・・。」

「・・・なるほどな。

確かに理由はよく解るぜ。

俺も・・・俺みてえなヤツに『靈光波動拳』は勿体ねえって思ってたしな。」

「面倒だが・・・わしも良い。

この小娘・・・幽助より才能がありそうじゃ。」

「チツ！悪かったな！ばあさん！」

これが おばあさん・・・幻海師匠とお兄さん・・・浦飯師匠との初めての出会いだった。

私は師匠達に連れてかれ、幻海師匠が生前住んでいたという山に連れてかれた。

私の肉体はコエンマ様によって元の世界にあつた肉体の心臓は動き、一時的に仮死状態となつたので、スグに肉体に戻る事ができた。浦飯師匠は肉体を持つてたけど、幻海師匠はすでに死んでいるらしく、靈界の特別な術でピーク時の肉体で一時的に復活・・・。

そして・・・2人の師匠達による 地獄が生易しいと思うくらいの修業の日々が始まってしまった・・・！！！！！！

第1話 地獄からの生還(?)

第1話 地獄からの生還(?)

地獄の修行が始まってから、3年後・・・。

朝昼晩 年中無休で2人の師匠による心身の修業を受け、なんだか死が恐ろしく思わなくなった。

うん・・・。それほどまでにあの2人の修業は恐ろしいのよ・・・。精神が壊れるかと思っただくらいなもの・・・。

幻海師匠によつて、精神と霊力、霊波動を学び

浦飯師匠には肉体、感、ケンカの仕方を教え鍛えて貰った。

スパーリングをしたりしたけど、最後まで勝てなかった・・・！

幻海師匠はさらに強いけどね。

まるで修業が『死』のような日々によつて私は『靈光波動拳』継承者となった・・・。

幻海師匠から教わった この業は 私は恐ろしい・・・。

『癒す力』と『破壊の力』が合わさつて、まるで爆弾みたいに、その人自身が選ぶと思えるから・・・。

でもあの地獄の日々で学んだ事はものすごく多い。

最後の試練として浦飯師匠から『靈光玉』も受け取った。(3週間
暴れ続けたけど。)

浦飯師匠の仲間である 邪王炎殺拳を取得している飛影さん 九尾

の妖狐の蔵馬さん 高レベル霊能力者の桑原さんなどにも鍛えて貰った。

飛影さんが一番命の危険を感じ 蔵馬さんは独自の修業により成果が一番出た。

桑原さんには霊力で剣を創るやり方を教えてもらった(その後飛影さんに剣技を学ぶ事になったけど・・・)。

霊力だけじゃあなくて、魔法にも手を出した。

と言っても、デバイスが無いから射撃魔法、幻術魔法、防御魔法、捕獲魔法、補助魔法も少しばかり練習しただけ。

中でも上手いのは幻術魔法と射撃魔法・・・。

師匠達に使っても無意味って位当たらないし、霊丸を使った方が強いし速いからあんまり使わないけどね・・・。

修業を始めてから1年と少しでぼたんさんがエリオっていう赤毛の子供(私もだけど)を連れて来た。

何でもある組織の被害者で クローンで作られたらしい。

当時 研究者共により人間不信になっていたエリオを私は修業の間合間に会いに行きエリオと遊んだりした。

遊ばせるだけでも苦労したわね・・・。

半年後にはエリオも師匠達の修業に加わる事になった。

でも、この修業の日々の御蔭で解った事がある。

元の世界には『魔法』があるけど、あの時は『非殺傷設定』が普通だと思ってたけど、

今では逆に『非殺傷設定』なんかなければ っと思う。

そうすれば『傷つける』行為がどういう事かわかるから・・・。

まあ、私が師匠達に会えたり、『人生』っていうのを楽しむってのがわかった。

1日に5回だけと霊丸を撃てるほどに強くもなった。

結構良い事づくしね。

一応、コエンマ様との約束で極楽か、生きているか決められるけど・・・。

浦飯師匠の様な妖怪じゃない私は1度しかない人生・・・。

ここで諦めるなんて・・・出来ない。

私は霊体となつて、ぼたんに霊界へ連れて行ってもらいった。

霊界は私が来た時より かなり忙しくない様子。

コエンマ様がいる扉に入ると、私を待っていたようで近くには青鬼のジョルジュ・早乙女さんが立っていた。

「フム。待つておつたぞ！ティアナ！

この3年、よくあの2人の修業を耐え抜いたな！」

「ハイ！コエンマ様！

これもコエンマ様のおかげです。」

「そうか。では早速入ろう。ティアナ・ランスター！

お主は兄 ティーダ・ランスターがいる天国へ行くか、それとも生きるか・・・！

・・・どちらを選ぶ？」

「・・・私は 『生きる』 事を選択します。

師匠達の修業の中で解つたんです。

人生つてのは大変だけど、『生きる』事でそれは楽しい日々と言う事が・・・。」

「そうか・・・ そうか・・・。

フム！ではお主を元の世界・・・ミッドチルダへ返そう！

もしもの時の為にコレを渡しておこう！

「ジルジュ！」

「ハーイ！コエンマ様！」

「どうぞ！ティアナさん！！！」

「あ、ありがとうございます。ジルジュさん。」

渡されたのは淡い蒼色の折りたたみ式の携帯電話だった。
何処にでもありそうね・・・。
これなら結構持ち歩きできる。

「その携帯電話は霊界、魔界、そして幽助達が居る地球にも連絡ができる。」

電話帳にはわしらのが乗ってるからな、後で確認するとよい。」

「ハイ！」

「何かあった時はわしの所に電話をするがいい。
力になれる事ならば 力になれるからな！」

「解りました！」

「ふむ！では今から2時間後に転送を開始する。」

それまでは浦飯と幻海師範の所に行き、話でもすると良いだろう」

「何から何までありがとうございます！」

良いモノ貰ったなあ・・・。

携帯をいじくりまわしていると、登録しようとした人達の名前が全部合った。

飛影さんは携帯持っていないからしかたないけど、蔵馬さん、桑原さん、幻海師匠、浦飯師匠、螢子さん、温子さん・・・
ぼたんさん、静流さん、雪菜さん、鈴駒君、酎さん、凍矢さん、陣さん、死々若丸さん、六道さん、骸さん、鈴木さん
あとエリオのもあった。

・・・流石コエンマ様。

ぼたんさんに送られて修業していた 幻海師匠の家に来た。
中に入ると、浦飯師匠がだらけながら座り込んで、幻海師匠は正座をしていた。

エリオは顔を俯いて座っていた。

「待つてたよ。 ティアナ。」

「幻海師匠・・・。」

「ティア。 お前の答えを聞け。」

「ハイ。 浦飯師匠」

・

・

・

・

「そうかい。 それがアンタの答えかい。」

「ハイ。 幻海師匠。 私は病が寿命で死ぬまで生き続けます。」

「ならアタシが言う事は何もないよ。 それがアンタの答えなんだ。」

だが、これだけは言うておくよ……。これから先、アンタは『靈能力者』だ。

非殺傷なんて偽善な魔法を使う者達の様にはなるんじゃないよ。良いかい、ティアナ。アンタが首入れた世界は『力がない者は何されても仕方がない』のさ。わかるね？」

「はい……！」

私は、私が守りたいモノの為にこの力を使います。それ以外になんて使いたくないです。」

「そつか……。んじゃ、俺はそうだな……。」

ティア。ケンカを売る奴にだけケンカしろ。

おまえは人間の限界に達してるし、『靈光波動拳』の継承者だし負けはしねえだろ。」

「『靈光波動拳』はアンタが栄えるのも滅ぼすのも好きにしろ。

靈界の上層部の奴らとは話を付けて置いた。

まあ……。アンタみたいになった3年で『靈光波動拳』の全てを学べる奴はいないだろうがね……。」

「幻海師匠、浦飯師匠……。」

「解ってると思うが、ティア。

アタシが付けた『呪靈錠』はココって時以外は外すんじゃないよ。

それは長く付けていればいる程……。底力がつく。

アンタの切り札になる。いいね？」

「ハイ……！」

さて、問題はこの子ね・・・。

私は今だ俯いているエリオに近づいて少し微笑みながらエリオに喋りかけた。

「エリオ。」

「ティアナさん・・・。」

エリオは私の方を見るとまるでダンボール箱に入っている子犬がさびしそうに見上げているようにも見えた。
つい、抱きしめてギュっとしたくなるのを抑えてエリオの頭を撫でながら寂しがつている弟子に活を入れる。

「頑張りなさいよ。」

師匠達は厳しいけど、その分力になる。」

「ハイ・・・。」

でも、ボク・・・」

「エリオがミッドチルダに来たいって言うなら今は我慢して修業してなさい。」

「解りました・・・。」

約束してください・・・ティアナさん。

ボクがアナタと肩を並べるほど心身共に強くなったら・・・その時は一緒に居させてください！！」

この時のエリオの眼はすでに寂しいなどが無く 真直ぐ未来へ進む力を持っていた。

その事に嬉しくなった私はつい、頷いてしまった・・・！
その後、再会したエリオとどうなるかは・・・まだ未来の話・・・。

私は平行世界の・・・ミッドチルダ・・・。

元の私の世界へ返してもらった。と言っても、何時でも魔界経由で地球に行けるけどね・・・。

取りあえずはいざって時までには霊力を使う技はなしね。

逆に魔法で再現出来れば、言うことない。

さてと、取りあえずは・・・。

久しぶりに家に行ってみようかな・・・。

3年前までいた　兄さんと暮らしていた　あの家に・・・。

第2話 思い出は時の中に

昔・・・兄さんが殺されるまで住んでいた家・・・。

そこには 新しいポストと名前があり、庭には新しい遊具が置いてあり

2人の子供が遊具で遊んで 横で見ている女性が1人いた。

3年・・・。

私にとっては師匠達との生活は凄く楽しく厳しかった。

でも、ミッドチルダだと 私の家には新しい家族が住んでいた。

これ以上、見ていられなくなった私はその場を去った。

何処にも行くあてなんて無い。

兎に角歩きまわっていた。

太陽が沈みかけ夕陽が出てオレンジの空が出ている時 私は1つの公園を見つけた。

私は公園のベンチに座り込んで、回った所を思い出しながら遊んでいた時の事を思い出していた。

3年で変わっている所がすごく多かった。

友達と一緒に回っていた所も潰れて新しいお店が開いていたり、大きなビルが立っていた。

あ・・・

「そつか・・・。3年も過ぎてたら、死亡届出てるわよね・・・。」

地球だと死亡が確認されてから7日。

ミッドチルダだと2年その人物の存在が途絶えたり、行方不明なれば『死亡』され抹消される。

私らしくない。

こんな簡単な事、スグに解る筈なのに。
ふう・・・と私はため息をついて 次に何をするかを考えていた。

「取りあえず、『表』の仕事に就くしかないわね・・・。
『裏』なんてやってられないし・・・。」

表の仕事なら、危ない目には合わない。

でも、問題が1つある。

私は今、家なしで戸籍もない状態。

さらにはお金も無い。

ミッドチルダでは就業可能年齢が低い。

だから探せば働けるけど、お金が無いと履歴書もペンも買えない。
ココには魔法を使ったモノが多く 日本みたいに公衆電話なんてモノも無い。

さてと・・・どうしようかしら・・・。

そんな時、眼の前に1つの看板が合った。

日本でよく浦飯師匠や幻海師匠に連れて行って（稼がせてもらった）

もらった所——『パチンコ』。

エリオがいればもつと稼げるんだけど・・・

仕方ない。

ヤルしかないわね・・・（ニヤ）

——数時間後——

店を出た私の手には、タバコ、菓子などが入った袋と少し厚くなったサイフが合った。

やっぱり、パチンコはこうでないとね。

それにしても、ここのパチンコは変わってるわ・・・。

あの「なの！」って語尾を付ける白いバリアジャケットを身に付けた管理局の・・・悪魔だっけ？

リーチが掛かるたびに、バインドで敵を封じるって、どうかと思う。（リーチ時 『これが私の全力全壊！』で攻撃姿勢に移る。）

しかも当たりだと『ディバインバスター』 大当たりだと『スターライト・ブレイカー』っていう砲撃魔法・・・。

結果はどちらもオーバークル。

失敗だとバインドが解けて避けられるっていうオチだし・・・。

これでお金も出来たし 後は仕事ね。

タバコを口に加え、ライター（浦飯師匠から貰ったジッポ）で火を付ける。

ぶふあ～～ミッドチルダのタバコも中々・・・。

さて次は・・・このパチンコ店の右横の横にある雀荘。
なんか嫌な予感がするんだけど・・・。

この際だし、いつか。

私はこの雀荘で 管理局・・・死神と会う事なんて知らなかった。

雀荘に入った私は早速、3人の所に入り打っていた。

勝率はまあまああってところかしら。（現在2位との差300点）

「ネーちゃん つええな！」

「だけど、俺らも負けねえぞー！」

「それは楽しみね。 返り討ちにしてあげる・・・！」

「オメエら！気はれよー！！

この決闘はぜってに（金的意味で）負けられねえぞー！！！」

「「おうー！！」」

そう。

私達は今 『賭け麻雀』をしていた。

まあ雀荘で賭け麻雀は・・・ある意味でデフォでしょ？

「あ、それポンね。」

「ゲッ！マジでかー！？」

よし。

これで、役ができたわね。

「おいおい！このネーちゃんにそんなもの渡したらダメだろうが！
」

「悪いけど、それロン。
『大四喜』。」

「『なあにいい！！？
Y A K U M A N Nだと！！！！？？』」

ケケケ・・・儲け儲け。

そんな時、ドカドカという荒い足音を立てながらバリアジャケットを着た人達が入って来た。

え、ウソ・・・まさかの時空管理局？

ココ、なんかやってんの？

「失礼します・・・！

コチラ時空管理局 フェイト・ハラウン執務官！
賭博、麻薬売買、違法研究の容疑で全員任意同行します。

任意ですので、拒否権はありますが・・・疑われなくてはならぬ同行をお願いします。」

つと、金髪のツインテールをした露出が多くてマントで隠している女性が死神が持つカマを持って言われた。

・・・って 任意同行しても管理局行く事になるし、拒否しても戦闘になるだけ・・・。

しかも、戦闘前にバリアジャケットを身に付け武器持ったまま言わ

れても明らかに強制としか思えないのは私だけかしら？
それにしても、ココ、研究なんかしてるわけ？

そんな事を考えていると 私と一緒に麻雀をしていた1人がデバイスを発動して突っ込んだ。

1人が突っ込むと私以外の人達がデバイスを発動して管理局と戦闘する事になった。

え？ なんでいきなり？ 話し合いとか無いわけ？

しかもコッチから攻撃したら正当防衛で戦闘が始まるじゃない・・・！
そうなる私の方にも攻撃してくる管理局の局員も出てくる！

まあ、治安維持局だから話せばわかってくれるだろうけどさ・・・。

「・・・コチラに従わない場合での戦闘・・・。

正当防衛のため、反撃をします。」

「んだとゴラアアア！！？」

えっと、この場合私はどうしよ・・・。

やっぱり戦闘も行わず白旗上げておくべきかしら？

一応、私はここにはじめて来た客なんだし 攻撃してくる事は無い・
・と思う。

誤射があれば攻撃魔法が飛んでくるだろうけどね・・・。

取りあえず、戦闘もせず逃げもせずに座ったまましていると さらに可笑しい状況になった。

そう・・・。管理局の男の局員の1人が私に杖を構えて攻撃をしてきた・・・！

「デザイア・シューター!!」

「っ!？」

シューン!

顔面直撃をギリギリの所で避け、転がりながらその場を離脱をする！
攻撃が無い事を確認し、立ち上り攻撃をしてきた男の局員を睨みつけるように見る。

髪は短髪の茶色。目は黒・いわゆるイケメンと呼ばれる顔付・・。

「なんですか？いきなり・・。」

「ふん！法を破る者にそんな事言われたくも無い!!」

「待ってください！私は始めて来た客です！危害を加えるなんて出来ません！」

「ウソを言っな！」

ウソ呼ばわりされ 放たれた攻撃魔法が局員の方に戻り私に再度突っ込んできた。

表の局員なら 話せばよく解る。 ってコエンマ様から聞いてたのに!？

やっぱり管理局にもこういう輩はいるもんだね・・めんどくさい・・。

「悪いですけど、私デバイスなんか持ってません！」

「デバイスを持たない違法者がいる者か！『デザイア・シューター』」
「！！」

そう言うのと局員の周りに10個の攻撃魔法が現れた。

そして10個の攻撃魔法は私に向かって四方八方に飛ばし突撃してきた。

10個ともかなりの魔力が込められている・・・当たれば大抵の間はノックアウト出来るほどの・・・。

避けるのも攻撃するのもすごく簡単。

だけど、攻撃したら なんかめんどくさい事になるだろうし、かといって、わざと当たるのも引ける。

避ける事に専念するしかなさそう・・・。

と言う事で私は避け続けた。

幻海師匠からの石避けよりは一万倍マシ。

（石避け 目隠しをし、霊力が籠った石を避ける修業。

これにより、靈感を鍛える事ができるのだ・・・！！）

30分ほど避け続けていると、先ほどのフェイト・ハラウンという女性が局員の方によって来た。

「大丈夫ですか！？」

「は、はい！ですが、気を付けてください！年齢の割には戦い慣れています！」

私がサポートするので、ハラウン執務官はメインをお願いします
「！！」

「解りました！！」

フエイト・ハラOWNという女性はデバイス（鎌）を構えて、私に突っ込んできた。

なんでこの人の攻撃と、局員からの攻撃を避ける事になるの！？
私が鎌を避ける度に、ブンっという音が鳴る。

「アナタはなぜこんな事を・・・！！？」

「いや、待ってくださいよ！ 私はソチラに危害を加えるつもりないです！

それにこの状況を作ったのはアナタ達です！ なので、攻撃を止めてください！」

「フエイト執務官！？」

私が叫び混じりに言うと、鎌を持った女性は攻撃をやめて私から距離を取った。

その行動を見た男の局員は驚きながらも攻撃をやめた。

あ、あぶなかった・・・！

この人 スピードだけは幻海師匠の÷2ぐらいの速さを持つてるなんてね。

それに、鎌によりリーチ差もある。負けるはず無いけどその場合ケガさせるだろうし、

ケガをさせたら、管理局に縛られることにもなる。

その場合、身元を調べられて 3年前失踪（？）した事もばれちゃう。

ある意味でこのまま戦闘が終わればいい事だらけ・・・！

「では 取り合えず、話がしたいので本部までご同行してください。

」

「・・・わかりました。

（仕方ないか・・・ここで争って調べられると困るしね・・・）」

その後、私はこの女性・フェイト執務官に連行され時空管理局本部に連れてこまれた。

そこで尋問が行われたけど 豚の様な丸っこい体をした男の人や紫色の髪をした研究者などの事を聞かれたが

今日来たばかりの私は答える事ができず、全て『知らない』と答えた。

事実、コエンマ様からも時空管理局の事は聞いたけど深くまでは知らないし聞いてない。

まあ・・・尋問中に機械で何か調べられていたようだけど 私に『害』があるんだったら潰すだけ。

このまま問題無く 管理局の眼から離れれば 管理局がサポーターとしている研究材料に成らずに済む。

でも、私の携帯（コンマ様から貰った）大丈夫かな・・・。

アレないと 霊界にも魔界にも地球にさえ連絡出来ない・・・。

「そうですか・・・。

では ティアナ・ランスターさん。

尋問はココまでで終わりにします。」

「ハイ。」

尋問が終わり、私の言葉が本当だと言う事が解るとスグに部屋から出してもらえた。

店内にあった監視カメラと捕まった古株の1人が私がはじめて来た事を助言があったからだけだね。

その後、私はホテルに泊まって寝た。
疲れた・・・！！

第3話 靈界探偵 認定！？

雀荘での事件から一週間たった。

私は雀荘等で稼いだお金を使い、戸籍謄本等を手に入れ小さなアパートと契約して

アパートから近い所にあるアルバイトを手に入れた。

っと言っても配達だけだね。

ついでにバイクの免許書を手に入れる為に教習所に通っているわ。

アッチ（地球）にいた時も免許手に入れてたから復習程度だけど・・。

そんな日々を送っていたある朝・・。

私が目が覚め体を起こし視線を部屋を見ると、見覚えありすぎる1人の女性がいた。

その女性は桃色の着物を着て青のポニーテールをしている・・。

「どうしたんですか？ ぼたんさん。」

「あ、ようやく起きたね！おはよう。ティアナ！」

「おはようございます・・。で？どうしたんですか？

あ、ぼたんさんがミッドチルダにいる私に会いに来るって事は靈界で何かあったんですか？」

「流石ティアナだね。その通りだよ。」

えつと・・・確かコエンマ様に『武装教団正聖神党』の事は聞いてるね？」

「あ、はい。確か 10 年前にもその組織の人達が霊界が持つ異次元砲・・・こっちで言うアルカンシエルの様なモノを地球に撃とうとした奴らですよね？」

「そうさ。あの時に殆どの『武装教団正聖神党』は消せたんだけど、残っている奴らが自分達を『神』を名乗って平行世界でワザと殺し、死んだ人間の魂に漫画とか、アニメの力・・・

テリトリー

そうだね・・・コッチでいう『領域』や『魔法』みたいな能力を与えて、あろう事か記憶を持たせたまま転生させたんだよ。」

「記憶を持たせたまま転生させるとダメなんですか？」

ソウル・ソサエティ

「本来、輪廻転生する人間は霊界で『審判の門』を潜って平行世界の『尸魂界』っていう別世界に飛ぶのさ。

そこで『流魂街』と呼ばれる街で現世・・・つまりこの世にいた『自分』の記憶を曖昧になる程の時間を過ごさせてから転生を行うんだよ。」

「？ え、でもなんで自分を曖昧にさせるほどの時間を・・・？」

「こうする事で『自分』が消えやすくなって、来世で新しい『自分』を無理と矛盾がなく魂を再構成出来るんだけどよ。

逆に『記憶』を持たせた状態で転生を行うって事は、人間の魂を無理矢理再構成する行為なんだ。

そうすると世界のバランスが傾きやすくなり、世界からの抑止がか

かるんだ」

「『世界の抑止』って……どういうことですか？」

「例えばだけど、幽助ほどの力を持っていても、世界からの抑止がかかる、今のティアナと同じ位の力しか出せない。

他にも、自然的、人為的に存在自体を消そうとする見えない力って言った方がいいかね……。」

浦飯師匠の力が……今の私と同じに！？

反則の力を持つていれば、その分抑止がかかるってことかしら？それにしても、『存在自体を消す』って……。

「それじゃあ、世界のバランスっていうのは……？」

「全ての世界はプラスとマイナスの2つの力が合ってね？

2つが存在するから結果『0』になり、災害とかが起きにくいんだ。少しでも……『1』でも傾けば、世界に災害が多くなる。

一番厄介なのはマイナスに傾いた時さ。」

「マイナス？って事はさっきの災害はプラスって事ですか？」

「そうだよ。プラスに傾けば『自然災害』

ホロウ

マイナスに傾けば……負の心を持った人間の悪霊が『虚』と呼ばれる人化物と化すんだ。」

「人間の霊が……化物に……。」

「そうさ。

もちろん、『虚』を倒す者が居るから安心だけだね……。」

「それじゃあ、『虚』になった人間の霊はどうなるんですか!？」

「『虚』を倒す者・・・バランサーが持つ霊的な刀によって『虚』の時の罪を洗い流させて『審判の門』へ連れて行かれるのさ。」

「じゃあ、全ての人間が『審判の門』へ行く・・・わけじゃあないですよね・・・。」

「そうだね・・・。」

霊界にも『地区』の様なモノがあるんだよ。

コエンマ様は幽助達が住んでいる地球と地球の平行世界を4つ。あとはこのミッドチルダとその平行世界を3つぐらいを担当しているのさ。

他の世界や平行世界は『閻魔大王』と呼ばれる人、あるいは階級を持つ人が魂を天国・地獄・転生のどれかに裁いているのさ。」

「って事は私が初めてコエンマ様と会った時忙しそうだったのは・・・。」

「大量に死んだ人間の魂を地獄・天国・転生って裁いてたのさ。」

そういうことだったんだ。

周りの鬼が凄く走り回ってたし、書類とか山積みだった。

「ところで ぼたんさん。

なんで、記憶を持たせたまま転生させるという行動をしたんですか?」

「簡単な話さ。

カウンタ

「ガーディアン

奴らは転生させた人間の負の感情と能力を育てて死後『抑止の守護者』として契約させ、自分の手駒にする。

流石のコエンマ様も『抑止の守護者』を雑には扱えないからね……。」

カウンター・ガーディアン

「『抑止の守護者』……?」

カウンター・ガーディアン

「『抑止の守護者』つてのは過去・未来・現在の人間がある一定を超えた者へする霊界からの契約。

契約内容は一定を超えた者は何でも願いを1つ叶えるのさ。

その代わりに！死後の魂を霊界に捕われ、契約の清算終了まで人の世の滅亡の可能性が生じたあらゆる時代・場所にその分身が世に下る事になる……。」

「それって……。」

「そうだね……。霊界の奴隷みたいな……モノだよ。

でも、カウンター・ガーディアンの御蔭で救えた命も少なくは無い。もちろん、断る事も出来る。」

奴隷……。

霊界でも人間を奴隷にする法があるなんて……。

契約の元、清算が終了って事は莫大な時間を過ごすってことね。

そうじゃないと、武装教団正聖神党の人達が記憶と能力を与え転生させたのにスグに終了しては意味がない。

まだ武装教団正聖神党が動かないって事は手駒が少ないと言う事。それか、浦飯師匠以上の転生者が現れないってところかな……。

「さて！暗い話はここまでにして 話を戻すよ！

えっと、その能力を持った転生者達はどうやらこのミッドチルダ、あとこの世界での地球に送られた様なんだ。

能力はそれぞれ漫画とかアニメから取られてるようなんだよ。

幸い、転生させた奴らは全員捕まえたからいいんだけどね 転生者自体は罪は無いんだ。

もちろん、この世界で罪を犯し死ねば地獄に行くだろうけどね。」

「って事は私の役目は その転生者達をどうにかする・・・って事ですか？」

「その通り！

ティアナには自分の為に悪事を行う転生者達を捕獲してほしいのさ。善事を行う者は別に捕まえなくても良いからね。」

「・・・。

解りました。

でも ぼたんさん。どうやって捕獲するんですか・・・？

まさか殺すわけじゃあ・・・。」

「そんな事はしなくていいよ。

ティアナは転生者を無力化して、捕まえて霊界に連絡してくれれば水先案内人である私達が霊界に連れていくからね」

よかった。

べつに殺す事に感情はないけど、出来れば人を殺したくは無い。

まあ・・・火の粉は払うけど・・・。

「それじゃあ、その転生者の人数って解りますか？」

「人数は33人。

若い男女が転生してるみたいだね。

それぞれ能力が被ってたりしてるけど、気を付けるんだよ？」

「ハイ。」

「ありがとうね。ティアナ！

では！オホン！

ティアナ・ランスターを『霊界探偵』として認定するよ！」

こうして私は 転生者達を捕獲する為に 霊界探偵として認定された。

この後、そのあまりの弱さと多さに苦労するのはまだ遠い話だった
りする……。

第4話 蘇りし英雄

5日前 ぼたんさんから『霊界探偵』として認定されてから『転生者』と呼ばれる人達を捕獲する日々が始まった。

『捕獲』と言っても霊界の事や『武装教団正聖神党』・・・『抑止の守護者』の事を説明する。

これで納得されず、悪事・・・人としての道を外す者はスグにでも捕獲しないといけない・

この場合は『魂』を捕獲し、ぼたんさん呼び出して審判の門へ連れて行つて貰う。

つと言つても、今の所見つけた転生者は3人。

アリシア・テストロッサさん（34歳） と キールド・テストロッサさん（父） エリアル・テストロッサ（エリオそっくりで驚いた。）

この2人はプレシア・テストロッサさん フェイト・テストロッサさん と暮らしていて、

昨日 材料を買つたためにミッドチルダで買い物をしていた所を発見して説明をした。

アリシアさん、キールドさん、フェイトさんは私に呼び止められた時、凄く驚いていたようだったけど、話は真剣に聞いてくれた。

キールド・テストロッサさんについては能力の1つに『特定キャラ惚れポ』つというモノがあつて、

コレでプリシア・テストロッサさんの結婚まで行つたらしい。

エリアル・テストロッサ君にも同じ能力があつたから、説明して

『ケスケス君』を使い『特定キャラ惚れポ』を消した。

（『ケスケス君』とは霊界が特別に作った霊具で 合意が無ければ能力を消せない。）

3人には『悪事を行わない事』と『転生者を見つけ次第私に連絡する』という約束をした。

そして、プレシアさんと前にあったフェイトさんにも事情を説明して納得して貰った。

「っと言う事で コエンマ様。

流石に今あの人の能力を解ければ、何が起こるかわかりません。それに、テストロッサ家は何の罪を犯してません。なので見逃してくれませんか・・・？」

『ウム！確かにそこに居るテストロッサの者達には罪は人並みしかしておらん・・・』

このまま平和に過ごしてもらえればコチラとしても対処が楽だ。これから人並み以下の罪であれば 霊界も来世で良く出来るだろう。

よくやったな！ティアナ！ その調子で頑張ってくれ！」

「はい！」

プツン・・・

ふう・・・。

私は少し力を抜いて 目の前にいる黒の長髪の美人であるプレシアさんと

金髪のキールドさん 金の長髪をしたアリシアさんとフェイトさん 短髪赤毛のエリアル君を少し微笑みながら見た。

「っと言う事で アナタ方2人は大罪を犯さなければ 霊界も見逃してくださるようです。」

「良かったわ……。能力とか良く解らないけど……。
この子達とこの人が居なくななくなるなんて……考えられないわ。
本当にありがとう……。」

「ああ。ティアナ君。本当にありがとう。」

「いえ、コチラは『霊界探偵』としての任務を全うしているだけです。」

ですが……。必ず私とした約束だけは守ってください。

コチラもアナタ方を狙う転生者がいれば『霊界』で対処しますの
で……。」

「わかったよ。」

でも、まさか『ティアナ』が転生者でもオリキャラでも無いなんて
ね……。」

私の場合は 精神的に弱かったらしいんですけどね……。
なんて言えない。

「それじゃあ、私はこの辺で……。」

もう、会わないと思いますけど……お幸せに。」

「ああ。ありがとう……！」

本当に良かった。

あんなに幸せそうな家庭を壊したくなんかない。

霊界の記録では平行世界のプレシア・テストロッサさんはアリシア
さんを実験の事故で失ってから狂気に駆られ、

何十、何百のアリシアさんのクローンを作り、その人生を『壊した』ことにより、

霊界でも等活地獄に何度も落ちたらしい。

等活地獄に落とされなかったプレシアさんも居るみたいだけど、その全ては自殺によって『転生』されているみたい。

さて・・・。

これで転生者はあと30人か・・・。

出来れば いい人であればいいけど、クズも居るでしょうね・・・。
気が重たくなる。

私はテストロッサ家と分かれて 路地裏から出た。

それにしても・・・まさかフェイトさんにまた会うなんて思わなかったわね。

雀荘から管理局本部、そして、この路地裏・・・。なんか縁があるのかしら？

フェイトさんと言えば平行世界ではクローンらしいけど、この世界ではキールドさんとプレシアさんが生んだ アリシアさんの妹。
でも年齢差は10位離れてる・・・。

キールドさん、アリシアさん、エリアル君からの情報で 転生者らしき人物を数人教えてくれた。

ティード・アキヤ

管理局・アースラ所属 執務官であり若干9歳で第97管理外世界でジュエルシードと闇の書の事件を解決した人物。

性格は良いらしいが裏では何をしているか解らない。

アレイル・バーニングス

第97管理外世界の人間なのにデバイスを持っていた人物。
珍しいレアスキルを持っていて紫に近い炎を灯す事で出来るらしい。

月村 零¥¥¥¥

第97管理外世界の人間でアレイル・バーニングスとは親友。
身体能力が凄く、5階のビルをジャンプするだけで屋上まで行け、
魔法無力化を持っている。

秋本 春歌

同じく第97管理外世界の人間・・・闇の書の事件で大活躍をした
人物でロストログア認定のカードの力を使っらしい。
管理局としては捕獲したかったらしいけど、カード自体はこの子だ
けしか使用できず、人格も悪くないと言う事で特別に使用を許可し
ているらしい。

クライド・ハラウン

当時 時空管理局提督巡行艦『アースラ』の艦長。

当時 時空管理局提督巡行艦『アースラ』の副艦長であるリンディ・
ハラウンと夫婦
彼らが言う『原作』ではすでに死んでいたはずの者。

ユーラ・スクライア

スクライアの一族の者で『ユーノ・スクライア』と共にジュエルシ
ードを追って第97管理外世界へやって来た。

物理的防御が強く。魔法無効化のレアスキルを持っている。

クレア・リミエッタ

巡行艦『アースラ』の通信補佐。

存在感が薄く、きずかれ難いが、金運がかなり強い。

『原作』では居ないはずの者らしい。

以上8名が現在解る転生者だと思われる人物達。
秋本春歌以外はミッドチルダに住んでいるようだ。

さて・・・さつさと転生者達の事は終わらせたいし・・・。

ん？

転生者って管理局に所属してるのが多い・・・のかな？

えっと、キールドさんが言ってた『原作』とやらでは『高町なのは』

『フェイト・T・ハラオウン』『八神はやて』の3人が主役。

転生者達はこの3人か、元闇の書の守護者にして現在、夜天の書の守護者である『守護騎士ヴォルケンリッター』達を狙うらしい。

しかも私・・・『ティアナ・ランスター』は彼らが作る部隊隊員の1人となつて事件を解決すること・・・。
ふむ。

はつきり言つて嫌だけど、転生者達をサツサと捕まえるなら管理局に入った方がいいみたいね。

任務達成後は管理局から離れれば良いし。

あーでもそうすると 霊力は完全にアウトで使えないか・・・。

レアスキル認定されて、管理局から狙われる『かも』しれないしね・・・。

なら幻術魔法を鍛えるしかなさそうね・・・。

後は仲間が必要。

エリオと蔵馬さんとか呼び寄せてれば大丈夫・・・かな？

私は人が居ない所・・・。

路地裏に霊力の結界を張つて、電話をかけた。

プルルル。

『ム？どうしたのだ？ティアナ。』

「すみません。先ほどお電話したのに。

えっと、コエンマ様。

テストロッサ家の情報によりますと

転生者達は管理局に所属している人が多いようです。

そこで、『原作』にも居ると言う私が管理局入隊し

転生者を発見し捕獲又は保護しようと思います。」

『・・・なるほど。

確かに平行世界でのティアナは殆どが管理局に入隊しているな。

だが、後に悲惨な眼に会っている。

それでも入隊するのだな？』

「・・・はい。

私が管理局入隊する事で『原作』にも近くなり、油断する転生者達が私に会いに来ると思います。

ですが、そうなると靈力を封じて活動しないといけません。

なので、蔵馬さんやエリオをコッチに呼び寄せてくれませんか？」

『・・・仲間か・・・。

そうだな。エリオはスグにでもそっちに連れて行けるが・・・。

蔵馬・・・いや、妖怪は送る事は出来ん。』

え？

私はコエンマ様の言葉に驚いた。

コエンマ様は常に平等に人も妖怪も靈界に住む人達も扱い、差別などしない。

中には大罪によって差別するけど・・・。

「な、なんですか!？」

『怒るな。ティアナ。簡単な話だ。』

ミッドチルダ・いや、お主の世界には魔界に住む者達・・・『妖怪』や『魔族』、『悪魔』の『概念』が存在しないのだ。

概念がない世界に『妖怪』を送れば その瞬間に魂の死を迎えることになる。』

そう・・・なんだ。

なら、妖怪、魔族が無理って、知り合いの殆どがダメじゃない・・・！

だとしたら戦力的に幻海師匠しか無理じゃない？

「そ、それじゃあ幻海師匠は・・・」

『幻海はお主とエリオを鍛えるために特別に許可が取れたのだ。』

本来、死を迎えている者に転生の輪に入れずに生きている者にその奥義を教える事は出来ん。

故にそちらへ送る事は出来ないのだ。』

「・・・って事はエリオしか送れないってことじゃないですか・・・？」

『・・・ふむ。』

ティアナ。1つ頼みがある。』

なんかいきなり コエンマ様が深刻な顔をしてコツチを見て来た。それにしても・・・頼み・・・。

コエンマ様が私に頼みをするなんて余程大変な事なのかしら？

「……なんでしょうか？」

『ある者の所へ行き、交渉して来てほしい。』

これは『靈界』……いや、その者で言う『靈長の関係者』として……』

カウンター・ガ

ーディアン

コエンマ様からの話によると 交渉相手は長年『抑止の守護者』をしており、魂の摩耗が激しく壊れやすいらしい。

しかし、その相手は『抑止の守護者』としての期間があと5回まで減っており、

コエンマ様も開放させたいほどの 善人 とまでは行かないが 気に入っている者だと言う。

交渉内容は 『ティアナ・ランスターと共に全ての転生者の捕獲又は保護をする。』

解決後は相手の願いを1つを出来るだけ叶える。

本来はコエンマ様が交渉しないと行けないけど、『抑止の守護者』

として契約を求めたのはコエンマ様からであり、交渉する資格がないと 暗い表情で言っていた。

交渉の内容は私のも有利で、『抑止の守護者』ともなった英雄が力になってくれるのは助かる。

なら、私はコエンマ様の代わりに交渉しに行く。

「解りました。 コチラも一時的とはいえ仲間が増えるのは助かります。」

『スマヌな。では今からその者の所に送る。』

ブッン。

切れたと同時に私の視界が路地裏から 熱風が吹き渡る広い荒野。
荒野には数えきれないほどの剣

剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣

丘の上には1人の赤い衣の様な服を着た 白髪の人が背中を向けて
立っていた。

私はその人の所へ歩き、数十歩の所まで行くと荒野に刺さっていた
剣が浮かび

全て私を狙うように向けられた。

ゴクン・・・と喉がなる。

「あ、アナタが 『英雄』 エミヤ ですね・・・？」

私がそう言うのと剣はさらに近付き、背中を向けていた人はコチラを
向いた。

「確かに。私はエミヤだ。

だが、人の名を聞く前にまずは自分の名を言うべきだろう・・・。」

「わ、私はティアナ・ランスター！

霊界・・・いえ、『霊長の関係者』です！」

「なに？『霊長の関係者』だと・・・？」

まあいい。それで？

ティアナ・ランスター・・・私に何の用だ。」

緊張する。

この人から発するプレッシャーが私を襲う。

浦飯師匠からの殺気を受け続けたけど、この人のは比じゃない・
!!!!

流石・・・コエンマ様から契約を御求めた人ってことね・・・!

「交渉に来ました。」

「ほう・・・。交渉と来たか。それで？内容はどのようなモノかな？」

「1つ言っておきますが 私はコエンマ様・・・『霊長』の代わりに交渉に来ました。」

英雄 エミヤさん。アナタとの契約はあと5回です。

そこで、今霊界で起こっている『転生者』と呼ばれる多種の能力を
思った全ての人達を捕獲、出来れば保護をする。

完了後、アナタは『抑止の守護者』から解放されます。」

「!!!」

つまり、5回分を『転生者』を捕獲又は保護をすれば私は解放され
ると言うことか・・・。

ではそちらのテイクはなんだ・・・？」

「コチラは『抑止の守護者』の候補となる『転生者達』を捕獲し、
あるべき転生の輪に魂を導く事です。

簡単に説明しますが、霊界の一部が33人の人間を行為に死を迎え
させ、能力を与えてからこの世界へ転生させました。

理由は霊界の乗っ取りでその為の戦力確保です。

私は転生者達を捕獲又は保護をし戦力を削るのが目的です。」

「なるほど・・・霊界・・・『霊長』が存在する所でも争いは存在する
と言うことか・・・。」

「もちろん、アナタにもテイクがあります。

捕獲、保護し終わり次第に霊界で出来る限りですが、1つだけ願いを叶えます。

生きたい なら肉体を与えます。 転生の輪に入りたいのなら、もどします。」

「……………」

いいだろう。この地獄から解放されるのならな……………」

その言葉と同時に私の周りを浮かんでいた剣軍は離れて、荒野に刺さっていった。

よ、よかった……………!!!

「ありがとうございます……………」

ではアナタには一時的にですが、ピーク時の体が与えられます。その後、ミッドチルダに転送されます。」

「ふむ。了解した。」

ほつとした瞬間、私は転送された。

ふう……………とため息をはいた。

それと同時に私の目の前に エミヤさんが転送された。

はや！ コエンマ様！仕事速すぎですよ!!!!

こっちはまだ緊張をほぐしてる所なのに……………!!!!

「ふむ。なるほどな……………」

さて、ティアナだったな。これからよろしく頼む。」

「は、はい。こちらこそ。」

こうして、私は英雄であるエミヤと共に転生者達を捕獲する日々が始まろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0907w/>

魔法少女 幽 遊 ティアナ

2011年11月13日03時31分発行